

「資本論を読む会」便り

No. 25
2017.8.16

第26回は商品の物神性のところの3回目でした。梅雨明け直前の蒸し暑い中、常連の方々が全員参加され、いつもの会場が少し手狭に感じられました。今回、わずか2段落しか進みませんでしたが、その分、中身は濃かったかと思えます。

◆第26回の内容

※ 編集人の復習ノート。議論を踏まえて編集人はこう理解した、ということです。小見出し直後のゴシック体は当該段落の要点、丸ゴシック体は本文やレジュメの要約です。原文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落番号、原著ページ番号、初めの数語を付けています(大月書店 全集版 による。段落は本文の字下げごとに数える)。文中の[第1文]等の「文」は、句点(.)で区切られた文章の要素です。

第1巻 第1章 第4節 商品の物神的性格とその秘密

※ 物神的: 全集版資本論(岡崎訳)では「呪物的」です。「物神的」のほうが一般的なようです。

【前回の復習】

司会のほうから前回のまとめがなされ、今回のところに進みました。

【第8段落】(88) だから、人間がかれらの労働生産物を互いに価値として…

互いに独立な私的労働による生産物は価値性格を持つ。

- (1) 異種の労働生産物を、交換において、価値として等しいとすることで、異なる労働を人間労働として等しいとする(そうとは知らずに)。 [第1～3文]
- (2) それゆえ価値の正体が分からなくなる。 [第4～7文]
- (3) 価値の秘密が解明されても、労働の社会的関係は相変わらず物と物の関係として現われている。 [第8文]
- (4) ・互いに独立な私的労働
人間労働としての同等性が → 労働生産物の価値性格の形態をとる。
 - ・これは、商品生産にだけあてはまる。
 - ・商品生産の諸関係の中に囚われていると、労働生産物の価値性格が永遠のものとなる。 [第9文]

段落冒頭の「だから」は何を指しているかが議論になりました。

「だから」は、具体的には第7段落の最後を指しています。そこでは、

私的労働の二重の社会的性格は、私的生産者の頭脳に対して、実際の生産物交換であらわれる諸形態でのみ反映する。つまり、

私的労働の社会的な有用性は → 労働生産物は他人のための有用物

異種労働の同等性は → 労働生産物は共通な価値性格を持つ
のように私的生産者には映る。

と述べられています。「だから」、私的生産者は、異種の労働生産物を交換において価値として等しいとしているだけであり、そうとは知らずに異種労働を人間労働として等しいとしている、ということです。

議論の中で、価値を値打ち、価値物を値打ち物と言ったりすることがありました。資本論の中では、価値はきちんと概念規定された上で使われています(第1章第1節参照)。言い換えた本人に誤解がなくとも、議論の中で誤解を生まないように、慎重にすべきでしょう。

同じ重さなら金のほうが鉄より値打ちがある、と言う場合の「値打ち」は価値を意味しています。しかし、この商品は値打ちがある、と言う場合はどうでしょうか。他と同じ価格だが性能が良いとか、同じ性能だが他より安いとか、そういう商品を指すわけですが、この場合は性能したがって使用価値を表しています。

価値のほうも、概念規定されているとはいえ、日常語を使っているので、気を付けないと日常語の意味に惑わされます(次の段落のところでも少し議論になりました)。

価値の理解に関して、労働生産物の交換が発展して(いつでもどこでも交換が行なわれるようになって)労働生産物に価値という性格が現われるという指摘や、価値という性格が現われることは労働生産物が社会的生産物となったことを意味するなどの発言がありました。

本文の「労働生産物は、それが価値であるかぎりでは、その生産に支出された人間労働の単に物的な表現でしかないという後世の科学的発見」はマルクスか、と質問がありました。ペティからリカードに至る古典派経済学者たちということです。(参考: 第1章第1節の注9)

要約(4)の最後の行について、本文には「科学によって空気がその諸要素に分解されてもなお空気形態は一つの物理的な物体形態として存続しているようなものである。」という例えがあります。この例えは適切かという問題提起がありましたが、どう思われますか？

同じく要約(4)の最後の行ですが、「労働生産物の価値性格が永遠のものと映る」について。現代の資本主義経済はいろいろな問題が噴出し、行詰まっているように見えます。それを解決しようとする、オルタナティブ経済学とか贈与経済学とかを耳にします。インターネットで検索して見つけたいくつかの紹介文を見る限り、商品経済を(つまり「労働生産物の価値性格は永遠のもの」と)前提しているように見受けられます(オルタナティブと言ってる割には)。(贈与経済学については当「資本論を読む会」でも、以前、話題になりました。)

【第9段落】(89) 生産物交換者がまず初めに實際上関心をよせるものは…。(注)28

生産物の交換比率が固定化し、価値量として現われることで、生産物の価値性格が固定する。労働時間による価値量の規定は、相対的な商品価値の現象的な運動の下に潜む。

(1) 生産物の交換比率 → ある程度慣習的に固定 → 生産物自身の性質から生じると見え出す。

例: 1トンの鉄が2オンスの金と等価値なのは鉄自身の性質

価値量が交換の実際の場面に現われることで、労働生産物の価値性格が固定する。

(労働生産物の価値性格が全面的に現れる) [第1~4文]

(2) 価値量の変動……交換者の意志・予知・行為から独立

(生産物の交換比率は、生産者の意志の外で決まる) [第5~6文]

(3) ・「独立し、社会的分業の諸環をなし、全面的に相互依存する、私的労働が、

↓ 労働生産物の、偶然的で絶えず変動する交換割合を通じて、

↓ 生産が、社会的に必要な労働時間に規制される。自然法則のように。(注28)

社会が要求する限度に絶えず還元される。」

という科学的認識が生まれるまでには、十分に発展した商品生産が必要であった。

・労働時間による価値量の規定……相対的な商品価値の現象的な運動の下に隠れている。

[第7~8文]

(4) 労働時間による価値量の規定の発見は、労働生産物の価値量の単に偶然的な規定という外観を解消させるが、その物的な形態を解消させない。 [第9文]

交換比率の固定化ということで、玉子の価格が話題になりました。何年間も価格がほぼ一定だというわけです(“物価の優等生”)。同様なものとして、昔は塩せんべいが4枚で5円だったとか(どのくらい昔?), あんパンは今でも安いとか、いろいろ飛び出してきました。しかし、「当時は当時」という声もあったように、この段落で言う交換比率の固定化とは少し事情が異なると思われます。

まず、この議論では円との“交換比率”になっています。玉子が物価の優等生と言われるのは、全般的な物価上昇、いわゆる“貨幣価値”が下がる中で、価格があまり変わらなかったからです。こうした状況で玉子の価格が変わらないのは、玉子生産の生産力が上昇し玉子の価値が減少したことの反映ではないかと思えます。

それで、交換比率の固定化ですが、ここではモストの「資本論入門」からの引用をしておくことにします。この引用は、かつて堺市南図書館で行なわれた「資本論」を読む会(2008~2012年)の記録(<http://p.booklog.jp/book/19345/read>)からの重引です。

生産がもっぱら自家需要に向けられているかぎり、交換はごくまれに、それも交換者たちがちょうど剰余分をもっているようなあれこれの対象について、生じるにすぎない。例えば毛皮が塩と、しかもまず最初はまったく偶然的なもろもろの比率で交換される。この取引がたびたび繰り返されるだけでも、交換比率はだんだん細かく決められるようになり、一枚の毛皮はある一定量の塩とだけ交換されるようになる。(大谷訳10頁)

こうして、いつでもどこでも1枚の毛皮はある一定量(a kg とします)の塩とだけ交換されるようになるにつれ、毛皮が塩 a kg と交換されるのはそれが毛皮だからだ、という観念が生まれるという訳です。

この段落では、生産物の価値性格の固定に対する価値量の役割が議論されています。その価値量について、価値が量であることが理解できないとの疑問が出されました。

これに対し、

価値を値打ちと考えると理解できない。商品価値とも言うように一般的な意味の価値ではない。交換価値で考えるとして、例えば 1トンの鉄=2オンスの金 とする。これは量として等しいことを表している。

商品の値段を考えてみると、値段は数で表されているから、量だと分かる。商品の値札は数字で書いてある。

などの説明がありました。

質問者は、商品の価値の意味を「資本論は初版から150年後の今日でも読む価値がある」というときの「価値」と同じと捉えていると思います。なお、この場合の「価値」も、多少は量的側面があります。「資本論は国富論よりずっと読む価値がある」という場合、価値の大小が比較されているからです。

広辞苑で調べると、

物事の役に立つ性質・程度。経済学では商品は使用価値と交換価値とを持つとされる。

ねうち。効用。「貨幣―」「その本は読む―がない」 (哲学用語の部分は省略)

とあります。程度、という説明がありますね。なお「経済学…」の部分の交換価値は、価値とすべきところです。この説明の言い方を借りると、商品の価値とは交換の役に立つ(=交換比率を決める)性質・程度、と言えるでしょうか。

次に、前のところで、商品生産というのは有用物を生産するとあったと思うが、交換できる場合、自分が欲しいものを相手が持っているなら他人のための生産となぜ言えるのか、という質問がありました。

自分は塩を作っているが、相手の持っている毛皮が欲しい。これらを交換する場合、自分は塩を自分のために作ったと言えるのではないか、という主旨かと思います。

ですが、塩を塩本来の使い方(調味料とか塩漬けとか)をする(=使用価値を実現する)のは自分ではなくて、相手です。このことを他人の使用価値を生産すると言っています。

要約(3)に示した科学的認識、「独立し、社会的分業の諸環をなし、全面的に相互依存する、私的労働が、…… 社会が要求する限度に絶えず還元される。」は、(注28)により、恐慌のことだと分かります。なので、恐慌によって、生産は社会が要求する限度に制限されるとなります。作りすぎ(過剰生産)には自動ブレーキがかかるということでしょうか。

※ 議論の主旨を取り違えていることがあるかも知れません。ご容赦下さい。メモを取るとき、漢字が思い出せず議論を聞き逃したりするので(パソコンの使いすぎ?)。